我が家のしきたり！

竹公

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
我が家のしきたり！

【Ｎコード】
Ｎ７３６３Ｃ

【作者名】
竹公

【あらすじ】
おかしな波多野家のしきたりに振り回される主人公、隼人のトタバタラブコメディーになる予定です！

プロローグ1（前書き）

作者が作った人生初めての小説のため、支離滅裂な所があるかもしれませんがこれからよろしくお願いします！

プロローグ1

皆様こんにちは。僕こと波多野隼人(ハタノ・ハヤト)は、今大変困惑&憔悴してます。それは、中学三年の冬休みに父こと波多野直樹(ハタノ・ナオキ)が言った3ヵ月前の一言が原因なのです！

そのときの話をすこしようと思います。

クリスマスの夕食での出来事でした。　　「我が愚息よ！波多野家のしきたりにより高校からは自活せねばならぬ。無論！我が家からの援助は学費のみ！したがって今から生活する場所を見つけるのだなムッハッハッハ～。」

と奴は無性に腹が立つ笑い方をしながら僕に言ってきたのです！ええ。もちろん僕は父の頭が狂ったのかと思い、母こと波多野恵子(ハタノ・ケイコ)に抗議しましたよ。しかし、あの母親は無残にもこんな言葉で切り返してきたんです。

「直樹さんとは、このしきたりの最中に出会ったの♪だ・か・ら、隼人も頑張れ～。彼女ゲットして帰ってくるのよ！」

そんなバカヌァ！！母まで頭が土地狂ったのか！？ならば、双子のマイシスターこと冬美(フユミ)&マイブラザーこと冬馬(トウマ)の意見を聞こうではないか！　　「冬馬、冬美、母さんと父さんは狂ったのかい？」

『隼人にぃ。そんなことみんな知ってたよ！人の話聞かないのも程々にね。』

なんと見事なハモリっぷり兄さん妬いちゃうよ。おっと失礼。あま

りのことに僕の頭がオーバーヒートするとこだったよ！あっそういえば僕、物心ついてから一族の集まりに出たこと無いんだったテヘッ。

「冬馬、冬美忠告ありがとう（黒い笑み）」

晩ご飯後の冬馬＆冬美がどうなったかはご想像にお任せしますね。確かプルプルしながら泣いてましたけどね。ハッハッハ見事に気分はすきっりしたよ！理不尽バンザーイ！

それから、僕はクリスマス後から頑張りましたよ。受験を済まし、住むところ、働く場所を探しました。

でもね、地元の高校に受かったものの、家と労働先が見つからないとゆう緊急事態のまま春休みに入ってしまい、冒頭のような半死人になってしまっているのです。ここからどうしよう…

第一話：行き先決定！？（前書き）

この小説は完全不定期更新です。あとオリジナルですが、この世のなか同じような小説があるかも知れませんのでご理解ください！

第一話：行き先決定！？

おはようございます。今は朝の七時ですが、実にいい朝ですね！雀が鳴いてますよー！

僕は、春休みでも比較的早く起きるほうなんです！　それに、しきたりのせいで毎日駆け回らないといけないので、早く起きなきゃならんのです。

ガッチャッ！

「隼人にぃご飯だよ～！ってなにしてるのっ！？」

おっとしまった！ヨガのポーズで頭の後ろに足を組んだままだっ！

「冬馬、ノックぐらいしろよ。見て分からない？ヨガだよ。目覚めがよくなるんだよねこれすると。」

「そっ、そうなんだ。先にご飯食べてるから降りてきてね～」

ふぅ。まぁ目覚ましのためだけにやってるって訳でも無いんですがね…

家探し&働く場所１００連敗してたらヨガでもしたくなるもんなんですね……

「隼人、手紙が来てるわよ。あら、玉三郎兄さんからだわ！どうしたのかしら？」

一階に下りると、いきなり目の前に何か出てきましたよ。少しビックリするじゃないですか！

「母さん。僕あての手紙でしょ？勝手に見ないでくださいよ……。返してくださいね。」

ヒョイッととりましたが、
物凄く嫌な予感がするんです！なにせ、日本屈指の財閥・轟グループの総帥からの手紙です！しかも、僕の天敵の父親ですよ！絶対！！何か裏があるに違いません！！
半開きの封筒から手紙を取り出しましたそれには以外にも普通なことが書かれていました。

『隼人くんへ
確か隼人くんは、波多野家のしきたりにはいるんだよね？じゃあうちで住み込みで働かない？学校も轟グループ系列に入ればいいしどうかな？
結論が出たら連絡してね！電話一本で飛んでくからね！！』

普通だ。あまりにも普通すぎる…それが逆に恐い！でも、春休みももうすぐ終わってしまう！！決断せねば、しかしあの人がいる魔の巣窟に住むには勇気がいります。う～ん…どうしようかな。今まで連絡しなかったのは、単にあの人が嫌だったからなのだが、さすがにもう住む当てもないしな～
「隼人！！何キモイ顔して別の世界に逝ってるの？早く内応教えなさい！」

我が母ながら厳しい一言を頂戴しましたね。息子に『逝く』など凶器的な言葉をつかってるんですよ！僕は目に涙をためながら母に手紙を渡しました。

「あっもしもし♪轟グループの本社ですか？玉三郎総帥に妹の恵子がぜひよろしくお願いします。と言ってたとお伝えてください。」
ガチャッ！
おーい。母さん僕が泣いてるときになーに勝手に決めてくれてるんですか？早くないですか？

「か、母さん何勝手に決めてるの（黒笑？」
今の僕は、楽しみに置いていたお菓子を食べられた時並みに理不尽さを感じています。しかし母は強かった…
「な・に・か・な？百連敗息子。もう行く当て無いでしょ？なら、善は急げってやつよ（はーと）
隼人、早くしないとそろそろ迎えがくるころよ。」
母はまだ電話して1分も過ぎてないのに凡人では考え付かない変なことを言いだしました。
「そんなこと言ってもさすがに…」
バッバッバババッ！
えっなんですか？このプロペラの音！？この音は軍用ヘリですか！？
もしかしてもしかしちゃうんですか！！
ガチャッ！
「人員確保！至急運搬開始！！」
あれっ！何で人員を確保するのに延髄チョップなんですか？
あっ意識無くなるよ…どうなるんですか僕。

第2話：本人の知らぬ間に（前書き）

見てくださってる皆様ありがとうございます！　　作者の力量不足で人物描写が皆無です。その辺りを解消するために、別の小説としてキャラなどを紹介するものを作ろうと思います。　このやり方はよろしくない、と思う方は一報よろしくお願いします。

第2話：本人の知らぬ間に

～冬休み～
轟邸にて

こんにちは、私は轟絵美子（トドロキ・エミコ）ともうします。
私には、ペットが居りまして、
「ペス」と申しますの。犬種は、土佐犬。年令は、１８才ですの。
今からご飯の時間ですので離れの犬小屋に向かう途中なのですわ。

ガチャッ！

「ペ～ス～！ご飯ですわよ～。」

あらまぁ、いつもなら小屋に入たっらすぐに来ますのにどうしたのでしょう。
「ペ～ス～ご飯抜きにしますわよ～。」
おかしすぎますわ！

パタパタ、パタパタッ

ペスめ私に小走りをさせるとはいい度胸ですわね、覚悟しなさいっ！

「ペスっ！！どうしてこないのっ！いつまで寝てるつもりなのかしらっ！」

ペスを触ってみたのですが、冷たくなっていますの！！し、心臓が動いていませんの！！

「ペッ、ペス！早く生き返りなさい！私の命令が聴けないのですかっ！！」

残念ながらペスは返ってきませんでした……

私は、2、3時間泣き続けましたの。そして、私は、新しいペットを飼う決心をしましたの。

「父様。私、新しいペットがほしいの。何か良いペットはいませんのかしら？できれば、大きいのが良いのですわ！」

そうすると、父様こと玉三郎が口を滑らしましたの！してやったりの回答を得られましたわ！！

「確か、隼人くんが波多野家のしきたりに入る時期に来ると思うんだが……はっ！いっ、今のは聞かなかったことにしなさい！！おっ、大きいのなら熊なんてど、どうだい？」

それならば、人間のペットもとい、家政夫として轟家に呼べば楽しく過ごせそうですわ！

「父様、私、決めましたの次のペットは隼人で決まりですわ！（黒笑）

手配をよろしくお願いしますわ（ハート）。」

父様の焦りようは傑作でしたの！私はこれからの生活のことを考えると笑みがこぼれますわっ！！

あー何を着せようかしら、どんなことをさせようかしら。

翌日、父様に頼んだのに何もしてくれていませんの。こうなった

ら、私自らの手で手に入れてみせますわ！

「もしもし、はい。轟グループの役員の絵美子ですの。さっき送ったメールの内容どうり波多野隼人が連絡の取った、もしくは取る予定であろう場所に圧力をかけなさい！！そして、隼人が行くところを無くしなさい！！よろしくて？」

～春休み直前～

私の圧力が効いたようですわね（黒笑）。隼人も１００件を越えるまで粘るとはなかなか根性がありますわね。早く私の所に電話すればいいのに！！

あぁ忌々しいことですわ！　まぁいくら頑張っても結果は変わらないのですけどね。オッホッホッホォ！！

あとは父様に手紙を書かせるだけですわね。どうやって書かせようかしら。

あっ良い方法がありましたわ！！

「父様、こんなものを見つけましたの。」

こんな紙切れが役に立つときが来るなんて思いもよりませんでしたわ。まぁ父様は一度母様に懲らしめられたらいいのですわ！

「どうしたんだい絵美子。今は手が離せッ！！！！どっ、どうしてそれを絵美子が持っているのだ！？

とっ、とにかく返しなさい！」

「えぇ、いいですわ。た・だ・し、私の言うとおりに物事を運んでいただきますわ。」

「わっ、わかった！これでいいんだな！？
ふぅ。あぁよかった、これで証拠隠滅できる。あとは冷華にさえ見つからなければ……」

まんまと罠にはまりましたわね。父様もそんなに動揺するなんて……。よほどやましいことがあるんでしょうね、まぁあとは母様にまかせて退散しますわ。

ドタドタ、ドタッ！　ガッチャリ！！

「あ・な・た～！！このキャバクラの請求書の束は何なのっ！？
私というものがありながらこんなとこに行くなんて許せません！」

「すっ、すまん！冷華、落ち着け！ウッウギャーー！……。」

退散してて正解ですわ。ドアごしから物凄い叫び声がしましたの。
まぁ、父様は、私に『返せ』と言っただけで、『母様に言うな』とは、一言も言ってませんし私は悪くないですわ。
あぁ。これで私の人生も少しは楽しみになりますわ！
早く隼人が来ればいいのに…。待ち遠しいですわ。早く春休みにならないかしら……。

第3話：到着！？そして出発！？（前書き）

週に二回くらいの更新で行こうと思います。

第3話：到着！？そして出発！？

バッバッバッ！！！

「隊長！降下準備完了いたしましたっ！！」

うぅ～。おはようございます。何だか頭から首にかけて微妙な痛みが走っていますね。　それにしても外が騒がしすぎます。しかも、アイマスクで目が見えません。

あっそうだったよ！僕は軍隊みたいな人達に拉致されたんだ……

「隊員Ａ捕獲物を目的地まで無事送り届けるんだ！ＧＯ！！！」

「ラジャー！隊員Ａ行きます！！！」

エッ！ちょっと聞ってくださいよ。普通ヘリポートとかにとまるんじゃないんですか？

あっ飛んじゃったよ…

「ウギャーツャクチボゥフィブレシ」

僕は、初めてスカイダイビング経験するんですが、変な言葉がでまくりです。しかも、声を出すと地味に口がブルドックみたいにプルプルするんですね。新たな発見だ。

それにしても僕は『Ｉ　ｃａｎ　ｆｌｙ.』を体験できてウレシーなーっておもうんです。あれっでも何だかちょぴり涙がでてきましたよ、なんでだろなぁ…

ブワァッサッ！！

「ぐぇっ。」

クッ苦しいです。涙も一気に吹き飛びました。何やら、パラシュートが開いたらしくいきなり首がしまったので、カエルを押し潰したような声がでてしまいました。

とにかく、これでようやく地上に着くんですね！着陸頑張って成功してくださいよ隊員Ａさん！！

「着地まで残り３０秒です。衝撃に対する準備をしてください。」

準備って何さ飛ぶ前気絶してたから何も知りませんよ！どうしよ～。

「ブベラッ！」

隊員Ａさんが、態勢を崩した僕をかばってくれました。ありがとう隊員Ａさん！しかしですね、彼は見事に後頭部から仰向きヘッドスライディングをしてしまったので、瀕死の状態に陥ってしまいました。

それにしても、着いた場所は轟邸にある広大な敷地にある、森のなかの草原地帯なんですよ。だから、どっちに行けばいいのか見当が付きません。

「隊員Ａさん、ピクピクしているところすみませんが、轟邸の本館の方向わかりますか？」

「こっ、ここから、北に５００メートル、ひっ東に２５０メートル行ったところにあります。こっこれが方位磁石です、健闘を祈り

ます。ぐ、グッドラック！」

ドシャッ！

あっ隊員Ａさんが意識を失いました。さて、拉致した罰としてこの人は放置していきましょう。

それにしても凄い森ですね、こういうところには熊の一匹や二匹出てきそうな雰囲気ですが、まぁ広くても所詮庭ですからそんな猛獣はいないですよね。

それじゃあ行きますか。

トントン、トントン

後ろから背中を叩かれたので、隊員Ａさんが復活したみたいですね。ケッ！僕を拉致しといてもう復活するとは許せません！振り向きざまに一発お見舞いしてあげましょう♪

ドミュ。

「あっあのう。どちら様ですか？人間様ですか？どうみても違いますねぇ。あっ、僕は、波多野隼人って言います。よろしくおねがいしますね。」　はい！出ましたよ！何か変なの出ましたよ！！あまりの驚きに殴りざまに握手してしまいましたね。ゼリーな感触でした！なかなか気持ち良かったです。何て変なこと言ってる場合ではないんです！

僕が見たものは、『熊型ロボット僕メタボなんです量産型』ですよ！機動力はそんなに無いんですが、攻撃力が凄まじいものを持っているんです。しかも、僕が攻撃を加えさらに、握手しているので、怒りモードに入っていてさらに、攻撃範囲内にいるんです。実にピンチな状態になっています！

『ターゲット認識いたしました。現場から排除いたします。グルグルポイシステム作動。身体の安全のためにゲルボールに投入。着地座標確認。今からポイします。』

こちら実況をしようと思い立った隼人です、ゲル入りボール内に入れられましたどうやらハンマー投げ風にポイされるみたいですね。熊さん気合いいれてますねー。メタボ腹でも世界新記録が出そうな予感がビンビンします。でわ逝ってきます！

『どりゅあああああ！！！！！』

こうして僕は流れ星になりました。さて何処に着くのやら僕にはもうわかりませんウェッ。気持ち悪い乗り物酔いならぬ、カプセル酔いだ。

「僕は死にましぇーーーん！！！」

第四話：意外な事実！！（前書き）

ダメな作者ですが、これからもよろしくお願いします。次の話と同時くらいにプロフィール的な物を別小説として更新しようと思います。ネタバレとかあると思うのでその辺はご勘弁を。

第四話：意外な事実！！

ビョイーン！ビョイーン！ドン！ガラ！ガッシャン！

あうち。鞭打ちになりそうです。

よし、見事不時着成功！闇夜に包まれ月がヒョッコリ顔を出しているなか、僕の後ろでは木々が薙ぎ倒され、鳥は飛び立ち、隕石が落ちたようなクレータが見事に出来上がっています。まさにプチ地獄絵図ですね。

ご心配なく僕はゲルボールに見事保護されており無傷です。ヤッホーイ！僕生きてるよ地上千メートルくらいから落ちたのに生きてるよ！生命の神秘に感謝しなきゃ！神様ありがとう！

何があったかというと、僕は昨日ゲルボールに保護されながら見事にハンマー投げ風に飛ばされました。そして、メタボな熊さんロボットは見事に世界新記録をだしました。

えぇそれは見事な投げっぷりでしたよ。なにせ、飛行時間が約１０時間で時速速度は平均２００キロだしていたのですから。

でも、実は以外にゲルボールでの飛行は楽でした。

ただし、ある出来事を除いてですけどね。

少しゲルボールについて説明したいと思います。

内にあるものは、小型モニター、轟カンパニー製の衛星型携帯電話（全世界で圏外無し、しかもスーコンピュータ並の処理能力で電池は新素材『太陽の欠片』という無尽蔵にエネルギーを供給できる。）、ゲル（保温性、衝撃吸収力、食べられる、増殖する）、完全にラッピングされたスーツセットの四点てした。内装はまぁ機械ですって感じをもろに感じる使用でした。

さて、実はですねここまで僕は現実逃避をしていたんです。長い説明でしたねそれでは、魂を口から出しながら飛行中に何があった

かお教えしましょう。

～投げられた約一時間後～　　ブィン。

突然モニターに電源が入り僕の天敵である従姉の絵美子さんが映りました。そしてどえらい事を話しだしました。

「おはようございますですわ、隼人。」

「おはようございます。絵美子ネェ。いきなり熊型ロボに飛ばされたんですがどうしたらいいんですか？これでは玉三郎伯父さんに会うことができないじゃないですか！！」

「ご心配なくてよ。あの手紙は私が父に無理矢理書かせたようなものですから♪だから、この文面どうりに契約がすすむ予定ですの。では、今からメールでそちらに送りますわ。

あっ！それと、その携帯電話は隼人から出ている波長で認識されるようにしてますの。セキュリティーはバッチリ安心しなさい。あと一億円するから落とさないようにするのですわ。」

何ですかその文面とかいう奴は！！僕は一切サインなどしてないはずですがおかしいですね…

しかも一億の携帯電話ってすごい使いずらいじゃないですか！丁寧に使わないといけませんね。

『Ｙｕｏ　ｇｏｔ　ｍａｉｌ．』

来ました来ました。ふむふむ、なるほど。

「ななな、なんじゃこりゃー！！！」

はい。文面にはものスッゴイ理不尽かつ逃れられない現実が記されていました内容はこんなのです…。

～契約書～

２０ＸＸ／３／１２　轟玉三郎が書いた波多野隼人に対する手紙は、轟絵美子が書いたものとし、波多野隼人が轟家の敷地に入った瞬間から隼人氏の身柄は以降、絵美子氏のものとして扱う。

印　波多野　直樹
　　波多野　恵子
　　轟　玉三郎
　　轟　冷華
　　轟　絵美子

僕、親にも見捨てられたのかな。しかも冷華伯母さんまで…、あの親達のことだからどうせ面白そうだったからの一言ですませるんだろうな。ハァ。

あまりにびっくりすると逆に冷静になりますよねーあぁ。涙がでてくるよ。

「グスン。絵美子ネェ、読みましたよ。で、僕をどうするんですか？」

「そうですか。では率直に言いますわ。あなたには、今からそのまま海外に飛んでもらい許婚候補達に会ってもらいますの。良い子達なので心配はいりませんわ。

入学式の三日前に向かいをそっちに送るのでそれまでに人数を絞

っておきなさい。そうですね…、3～5人くらいにすると良いと思いますわ。その後皆様には轟学園に入学してもらいますの。いいですわね？では、しっかりお決めになるとよろしいですわ。そろそろ疲れたのであとは頑張りなさい。ではごきげんよう。」

「え、絵美子ネェ！！僕は女性が苦手なんですよ！どこに行くんですか！疲れたとか無しでしょ！僕の人生を勝手に決めるなーーー！！！」

散々叫んだけれども絵美子ネェはフリフリの服をフリフリしながら画面から消えました。

えぇ、僕は真っ白に燃えつき、目は死んだ魚のように白く濁っているでしょう。ＴＨＥ　焼き魚！！

とゆうような出来事が有ったんです、そろそろゲルボールから出て用意でもしますか。眼鏡が壊れてしまったのでコンタクト装着、次にサイズがピッタリの高級スーツを着て、持ち物は携帯、ゲルを入れる小型カプセル、よし！これで一先ずＯＫかな。

それにしてもこのプチ地獄絵図からどこに行ったらいいんでしょうか？木々が生い茂った森のなかなので建物らしきものは見えませんしね。

ガサガサ、ガサガサ！

なんですかこの音は確実にこっちに近ずいてます！さては、また熊さんですか？それとも狼さん？

モフッ！

でました。執事服を着た熊さん体系の人でした！！一瞬熊さんか

と思いましたよ。

「お迎えにあがりました。私は執事のセブスチャンです。では今から案内させていただきます。こちらです、はぐれないようお気おつけてください。」

あっ危ないなぁ！以外とソプラノな感じの声が下ので、転けそうになりましたよ！しかもセブスチャン！あらきたりな名前とニアミスしてますよ！！

仕方ありません。許婚とか全員拒否して帰れば良いんだ。よし！行ってやろうでわないですか。

「わかりました。案内よろしくお願いします。」

こうして勇者（隼人）は魔王の城に乗り込みに行きましたとさ。

しかし、隼人は気付いていませんでした。この一連の動きを全て城に待機している魔王達に見られいることを。

第5話：魔王（許婚候補）達の決定！！（前書き）

長い間開いてしまい申し訳ない。プロフィール版は後日発表します。

週1～2更新で頑張らせていただく予定です。

第5話：魔王（許婚候補）達の決定！！

ある春休みの一日、満月が怪しげに光ながらいかにも魔王が居そうな雰囲気をかもしだしたある森の一角で、デデデ～ンとそびえ建つ中世ヨーロッパの大貴族がいかにも住んで贅沢してましたテヘッ♪と言いながらデップリとしたオジサンが出てきそうなお城出の話です。

お城のなかの大ホールのには、２０人？近くの人？達がいました。

「今から1時間後に許婚候補の審査結果の発表がありますので、このモニターを御覧ください。」

そこには、隼人とセバスチョンが歩きながらお城に向かう姿が映し出されていました。

しかし、モニターには小さく録画って書いてますがきずいている人がいるんだろうか、いやいないだろう。と反語を使ってしまうくらいに小さいんです。

魔王達の感想の一部＋隼人の感想

五利山呉理子（ごりやまごりこ）さんの場合

「ウホッウホウホッホウホッホ（家柄も良いし、あのキリリとした切れ長の目いいわ。）」

こんばんわ隼人です。皆さんわかると思いますがこの人？はゴリ

ラですね。ホモ・サピエンスじゃありませんね、ハイこの子論外。良い子用意してるって言ったのに人外とかなしですよね。

金星香奈里（かねほしかなり）さんの場合

「これで金、銀、財宝が私の手のなかに入るのね。ジュルリッ♪あらイケないヨダレが出てきました。顔なんてどうでも良いのよね世のなか金よ金！！」

うわっ。この子目が円になってるよ、目的がやばそうなんで却下ですね。

アリス・ガルツブルグさんの場合

「やだなぁ。私自由恋愛主義なのに……、今時許婚とか古いのよね。まぁ日本最大企業の親族だから仕方ないのかな。神様早く帰りたいな、選ばれませんように。」

この子はあのガルツブルグ家の一員ですか。う～ん候補に入れないと後々やばそうだから一応ＯＫとしますか。

別所春菜（べっしょはるな）さんの場合

「名前……わからない……でも……気配が隼人……絶対逃がさない……。」

実にやばいですね。僕を女性恐怖症と対人恐怖症におとしいれた原因を作った本人がいますよ。選ばないとまたどんなことされるかわかりません。丸にしないといけませんね……。神様助けて！

豚山豚子（ぶたやまとんこ）さんの場合

「ブヒッブヒブヒッヒッヒッヒーッ部費？（あー穀物うめー。にしても豪華な食事だ部費里のみんなにも食わしてやりてーだ部費）」

人外シリーズ第2段ですか。しかも部費ってどういうことですか。和食部とかにでも入ってるんですかね？豚カツや、生姜焼きにされますよ。でも人じゃないんでバツですね。

～城内の一室で～

「セブスチャンさん。できました。大人な事情や個人的な事情で四人選びましたこれでおねがいします。　にしても確かに絵美子ネェはいい子達を入れてくれてたみたいですね。」

ズズズー。この紅茶ケーキに良くあっておいしいなぁ。

「そうでございましょう。なにせ、あらゆる世界のトップクラスのかたを絵美子氏は選ばれてましたからね。
おかわりをおいれします。」

トプトプトプ

「セブスチャンさんありがとうございます。
しかし、絵美子ネェも僕が女の人にどれだけ恐怖を抱いているのか知っているはずなのに、なぜこんなやり方をするんでしょうか。本当いやになりますよ。　でも、こんなやり方以外で僕が異性に近ずくことはないと思ったんでしょうね。」

あの事件がきっかけで僕は内に籠もる性格になってしまったんですよね。
「仕方ありませんよ隼人さま。轟家、波多野家の皆様はあなたのことを気に掛けていました。
これがいい機会だと思って努力してみてはいかがですか？」

そうですね、それが一番いい考え方でしょうね。
おっといけない、話がそれるところでした。

「わかりました。
セブスチャンさん、そろそろ発表しなくていいんですか？」

「あっ、本当ですね。でわ発表に行ってまいりますので、少しお待ちください。」

そして一枚の紙が魔王（許婚候補の候補）達に配られました。

～以下の者を許婚候補とする～

アリス・ガルツブルグ
別所春菜

天神愛（あまかみ・あみ）
鬼道紅葉（きどう・もみじ）

以上４名

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7363c/

我が家のしきたり！

2010年11月17日10時22分発行